

# 聖人御難事

弘安二年一〇月一日 五八歳

去ぬる建長五年<sup>大歳</sup>癸丑四月二十八日に、安房国長狭郡<sup>ながさのこおり</sup>の内、東条の郷、今は郡なり。天照太神の御<sup>み</sup>くりや、右大将家の立て始め給ひし日本第二の御<sup>み</sup>くりや、今は日本第一なり。此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午<sup>うま</sup>の時に此の法門申しはじめて今に二十七年、弘安二年<sup>大歳</sup>己卯なり。仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に、出世の本懐を遂げ給ふ。其の中の大難<sup>はか</sup>申す計りなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり。其の間の大難は各々かつしろしめせり。

法華經に云はく「而も此の經は如来の現在にすら猶<sup>なお</sup>怨嫉多し。況んや滅度の後をや」云云。釈迦如来の大難はかずをしらず。其の中に、馬の麦をもって九十日、小指の出仏身血、大石の頂にかゝりし、善星比丘等の八人が身は仏の御弟子、心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短<sup>ひま</sup>をねらいし、無量の釈子の波瑠璃王に殺されし、無量の弟子等が豕<sup>せ</sup>象<sup>ぞう</sup>にふまれし、阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なり。況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教<sup>あ</sup>いまだ値ひ給はず。法華經の行者ならずといわばいかでか行者にてを<sup>あ</sup>はせざるべき。又行者といはんとすれば仏のごとく身より血<sup>滴</sup>をあやされず、何に況んや仏に過ぎたる大難なし。經文むなしきがごとし、仏説すでに大虚妄<sup>こも</sup>となりぬ。

而るに日蓮二十七年が間、弘長元年<sup>辛酉</sup>五月十二日には伊豆国へ流罪、文永元年<sup>甲子</sup>十一月十一日頭に<sup>傷</sup>きずをか<sup>蒙</sup>はり左の手を<sup>折</sup>打ちをらる。同じき文永八年<sup>辛未</sup>九月十二日佐渡国へ<sup>はいる</sup>配流、又頭の座に望む。其の外に弟子を殺され、切られ、追ひ出され、くわれう等<sup>過</sup>かずをしらず。仏の大難には及ぶか勝れたるか其れは知らず。竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり。仏滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり。過去・現在の末法の法華經の行者<sup>きょうせん</sup>を<sup>軽</sup>賤する王臣・万民、始めは事なきやうにて終<sup>ついで</sup>にほろびざるは候はず、日蓮又かくのごとし。始めは<sup>験</sup>しるしなきやうなれども、今二十七年が間、法華經守護の梵<sup>ふん</sup>釈<sup>しやく</sup>・日月・四天等さのみ守護せずば、仏前の御誓ひむなしくて、無間大城に墮<sup>お</sup>つべしとを<sup>恐</sup>そろしく想ふ間、今は各々<sup>励</sup>はげむらむ。大田親昌・長崎次郎兵衛尉時綱・大進房が落馬等は法華經の罰のあらわるゝか。罰は総罰・別罰・顕罰・冥罰四つ候。日本国の大疫<sup>やくびょう</sup>病<sup>びょう</sup>と大けかちとどしうちと他国よりせめらるゝは総<sup>罰</sup>ばちなり。やくびやうは冥罰なり。大田等は現罰なり、別ばちなり。各々師子王の心を取り出だして、いかに人<sup>嚇</sup>をどすともをつづ事なかれ。師子王は百獸<sup>怖</sup>にを<sup>怖</sup>ぢず、師子の子

又かくのごとし。彼等は野干やかんのほうるなり、日蓮が一門は師子の吼うるなり。故最明寺殿の日蓮をゆるしと此の殿の許とがしは、禍わざなかりけるを人のざんげげんと知りて許げんしなり。今はいかに人申すとも、聞きほどかずしては人のざんげげんは用み給ふべからず。設たひ大鬼神のつける人なりとも、日蓮をば梵釈・日月・四天等、天照太神・八幡の守護し給ふゆへに、ばっしがたかるべしと存じ給ふべし。月々日々につ強より給へ。すこしもたゆむ心あらば魔またよりをうべし。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はを怖そる心なし。一定として平等へいらも城等じょうらもいかりて此の一門をさんざんとなす事も出来せば、眼をひさいで観念せよ。当ま時の人々のつくしへ、かさされんつずらむ。又ゆく人、又かしこに向かへる人々を、我が身にひきあてよ。当時までは此の一門に此のなげきなし。彼等はげんげんはかくのごとし。殺されば又地獄へゆくべし。我等現げんには此の大難あに値ふとも後生は仏になりなん。設たへば灸治やいとのごとし。当時はいた痛けれども、後の薬なればいたくたていたからず。

彼のあつわらの愚癡あつわらの者どもい思みはげましてをとす事なかれ。彼等には、たゞ一円えんにを思もい切れ、よからんは不思議、わるからんは一定とを思もへ。ひだるしとを思もわば餓鬼道がきだうををしへよ。さむしといわば八はかん地獄ぢごくををしへよ。を思そるしといわばたかたかにあへるきじ、ねこねこにあへるねずみねずみを他人とを思もう事なかれ。此はこまごまとかき候事は、かくとしどし月々日々に申して候へども、ななごへの尼に・せう房せうぼう・ののと房とぼう・三位房さんいぼうなどのやうに候あをくびくやう、物をほへず、よくよくふかく、うたがうがい多たき者どもは、ぬれるぬるうるしに水みづをかけ、そらそをきりたるやうに候ぞ。

三位房が事は大不思議だいふしぎの事ども候あひしかども、とのとのばらばらのを思もいには智慧ある者をあそねませ給ふかと、ぐちぐちの人を思もいなんとな思もいて物も申さで候あひしが、はらはぐろとなりて大づちをあたりて候ぞ。なかなかさんさんざんざんとだにも申せしかば、たたすかるへんもや候あひなん。あまりにふしぎさに申さざりしなり。又かく申せばをこ人どもは死しもうの事を仰せ候と申すべし。鏡のために申す。又此の事は彼等の人々も内々は怖を思ぢをそれ候らむとを思ぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひひやうじやうじなんど此の一門にせられば、此へかきつけてたたび候へ。恐々謹言。

十月一日

日蓮花押

人々御中

三三郎郎左左衛衛門門さぶらうさぶらうざへもん殿殿のもとにとゞめらるべし。